



じゅうにひとえ おも 十二単 はどのくらいの重さがあったの

じゅうにひとえ 十二単のしくみ

じゅうにひとえ かまくらじだい なまえ へいあんじだい からいしょうぞく にょうぼう
十二単とは、鎌倉時代からのちによばれた名前で、平安時代には、唐衣裳装束・女房
しょうぞく はれしょうぞく いしょう ひとえ かさねうちき うちぎぬ うわぎ からぎぬ
装束・晴装束などとよばれました。この衣装は、おもに、単・襲袿・打衣・表着・唐衣・
はかま も ひとえ かさねうちき うちぎぬ うわぎ おな かたち
袴・裳で、できています。このうち、単・襲袿・打衣・表着は、同じ形をしたもので、
はだに近いほうから、単・襲袿・打衣・表着と着て、さらにその上に、袖はばの短い唐衣
をき いしょう き とくべつ ぎしき
を着ました。こういう衣装を、いつも着ていたわけではなく、特別な儀式のときだけに、着
たものです。

かさ かさねうちき たくさん重ねた襲袿

じゅうにひとえ ちゅうしん かさ き かさねうちき はじ かず き
十二単の中心は、重ねて着る襲袿です。初めは、その数に決まりがなかったため、そ
とき
のときによって、5枚・8枚・10枚・15枚などと重ねました。20枚も重ねたことが、
あったそうです。こんなにたくさん重ねるときも、同じ色のものを5枚ずつ3色重ねる、
といったテクニックが使われました。あまりにもたくさん重ねるので、11世紀の初めごろ、
ふじわらのみちなが けんりよく じだい まい さだ いつ きぬ
藤原道長が権力をふるっていた時代には、5枚と定められ、「五つ衣」とよばれました。

じゅうにひとえ おも 十二単の重さ

いま のこ え どじだい お じゅうにひとえ はか ちか
今も残っている、江戸時代の終わりごろの十二単を、量ってみたら、10キログラムに近
おも じゅうにひとえ へいあんじだい かんたん
い重さが、あったそうです。この十二単は、平安時代のものくらべると、かなり簡単な
しくみのものでした。ですから、かる きぬ へいあんじだい じゅうにひとえ
しかも、かさねうちき まい き おも
襲袿を20枚も着たら、たいへんな重さだったことでしょう。(監修・田代 脩)

